

調査報告

看護学生の死生観と他者意識

—臨地実習前後の比較—

早坂 寿美

(2011年12月22日受稿)

抄録： 看護学生の死生観と他者意識について、臨地実習前後の比較と両尺度の関係を検討するため、看護学科学生に調査を実施した。その結果、死生観は「人生における目的意識」に有意差が見られたが、他者意識は変化がみられなかった。死生観と他者意識の関係は、「死からの回避」と「内的他者意識」で弱い負の相関、「死への関心」と「内的他者意識」、「死への恐怖・不安」と「外的他者意識」、「寿命観」と「空想的他者意識」の間で弱い相関がみられた。臨地実習は学生の死生観構築に影響を与えていることが示唆された。また内的他者意識の高い学生は、死から回避せず、関心を高めている可能性を示していた。死生観構築には臨地実習での経験を活用すること、その体験をマイナス感情として残らないような心理的援助と教育が必要だと考えられる。

I. はじめに

我が国は高齢化が進んでおり、2010年の平均寿命は女性86.39歳、男性79.64歳となっている¹⁾。死を看取る場所も変化しており、在宅ではなく医療保険施設が8割を超えている。

職業として看取りを行う看護師にとって、死生観は大切なものとする。死生観があいまいであると、看取ることをストレスに感じることや、対象者に寄り添うことが出来なくなる可能性が生じてくる。新山と小濱²⁾は、ホスピス・緩和ケア病棟に勤務する看護師の職場による心的外傷経験の研究の中で「患者の死が特に心的外傷経験になりやすい」と述べており、職業として看取ることは、心理的負担が大きいと考える。看護師の心理的健康を保つためには、死について早い時期から考えることが大切だと思われる。

看護学生の多くは青年期である。現代の若者は、ゲームやテレビなどのバーチャルな死の体験はあるが、実生活においての体験は少ない状況にある。

医療職を目指すものとして、死や生について考えることは看護学生の時から必要なことである。藤腹ら³⁾は、「死に行く人を看取る者のストレスに対する考え方に大きく影響する元になるのは、なんといっても教育であろう」と教育の必要性を示唆している。しかし風岡ら⁴⁾は、「看護教育によって死に対する恐怖と不安は変わらず、死の受容にあたるような死生観への芽生えは少ない」と述べていることから、教育内容や時期について検討する必要があると思われる。

他者の死を看取る時、死生観の他に大切なのは、その対象者や家族の気持ちを感じ取れることである。看護職として、共感性は必要不可欠である。その共感性の前提として他者に関心を向けている必要がある。現代の青年期にあたる学生は、コミュニケーション能力の不足や対人関係の希薄さなどの問題が指摘されている。対人援助職である看護師にとって、他人に関心が持てるか、共感できるかは大きな問題である。看護学生が他者にどのように関心を抱いているか、また他者意識は死生観

にどのような影響を及ぼすのか検討する必要がある。

2010年4月に看護学科学生1年から3年生を対象に調査を行った。この結果、死生観は学年間において有意差は見られず、2年間の看護教育では変化しないことが示された。1年生は入学直後であったこと、2年生は専門科目が開始したばかりであったこと、3年生は緩和ケアの講義前であり、また領域別実習前であったことが有意差のなかった要因と考えられた。他者意識尺度も学年間に有意差は見られなかったことから、看護師を志す学生は、入学段階から他者に関心を持っている可能性が予測された。

死生観と他者意識との関係は、1年生では「死への関心」は「内的他者意識」と「空想的他者意識」、2年生は「内的他者意識」と「死への関心」、「空想的他者意識」と「死への恐怖・不安」、3年生では「死への関心」と「空想的他者意識」に弱い相関がみられた。看護学生は入学時から、死への関心と他者意識との間に何らかの関係性があることが窺えた。

この結果から、3年生4月の時期までに死生観が形成されている可能性は低いと考えられた。しかし「死への関心」と「内的他者意識」「空想的他者意識」に弱い相関がみられたことから、入学段階から死への関心、漠然としたイメージを抱いている可能性もある。そのため看護学生と他学科の学生に違いがあるのかを2010年9月に心理学科3年生と看護学科3年生の比較調査を行った。死生観尺度、他者意識尺度とも学科間での有意差はみられなかった。3年までの大学の講義では、死生観に影響を与えることはないことが示唆された。1年から3年生までの現在の教育内容は、死生観や他者意識の変化に影響を与えないこと、また他学科学生との違いも見られないことが明らかとなった。

死生観に関する学年間比較はあるが、同一学生での縦断的研究は見当たらない。変化を正確に把握するためには、同一学生による縦断的調査が必

要であるとする。また看護学生は臨地実習による体験が、看護観にも大きな影響を与えるため、実習を終えた4年次を対象に調査を実施し、学生時代に死生観の変化があるのか、また他者意識と関係があるのかを検討し、これからの教育方法や時期、心理的援助の必要性について検討した。

Ⅱ. 目的

死生観や他者意識は臨地実習前後で変化するか、また死生観と他者意識との関係を把握し、看護教育や心理的援助の必要性を検討する。

Ⅲ. 方法

1. 対象者

A大学看護学科1期生81名。

2. 調査期間

2010年4月－2011年9月。

3. 調査方法

質問紙による調査を行った。質問紙は平井⁵⁾が作成した臨老式「死生観尺度」と辻⁶⁾の「他者意識尺度」を使用した。死生観尺度は「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「解放としての死」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命観」の7つの尺度で構成されている。他者意識尺度は、他者への意識の向けやすさや方向に関する尺度である。他者の内面への意識・関心を表わす「内的他者意識」、他者の外面への意識・関心を表わす「外的他者意識」、他者の空想的なイメージを遊ばせる「空想的他者意識」の3つの尺度で構成されている。

質問紙は授業終了後に配布し、その場で回答をお願いした。回答は任意、無記名とし、回収を行った。提出を持って、調査への同意を得たとした。

4. 統計解析

解析には統計パッケージJMP9を使用し、同一学生の平均値の差の検討と相関係数を算出した。

5. 倫理的配慮

質問紙配布時に調査目的、提出は任意であること、成績には影響がないこと、調査は無記名で行わない個人は特定されないことを口頭及び文書にて説明を行なった。質問紙の回答をもって研究協力の受諾とし、回収を行なった。

IV. 結果

質問紙は、同一学生の領域別実習が始まる前の3年次とすべての実習が終了した4年次に実施した。3年次は81名に配布し、有効回答率は84% (男性12名、女性56名)、4年次は68名に配付し、有効回答率は92.6% (男性11名、女性52名)であった。

1. 死生観尺度の比較

3年次と4年次の死生観尺度の平均値をt検定による有意差検定を行なった。「人生における目的意識」に有意差 ($p < 0.05$) が見られ (表1)、4年次では生きる目的を意識していることが伺えた。下位項目を比較すると「私は人生にはっきりとした使命と目的を見いだしている」 ($p < 0.01$)、「私は人生の意義、目的、使命を見いだす能力が十分にある」 ($p < 0.01$) の2項目に有意差が見られた (表2)。4年次は3年次より、“生きる”こと、“生きていくこと”を意識している結果となった。臨地実習を通し、様々な症状の対象者と関わってきたことや実習終了後から就職活動を始めていることから、自分の人生の目的などを現実的に考え始めている結果と考えられた。

2. 他者意識の比較

3年次と4年次の他者意識尺度の平均値をt検定による有意差検定を行なったが、各項目において有意差は見られなかった (表3)。また平均値を比較するとほぼ同じ結果となっていたため、臨地実習は他者意識には影響を与えないことが示された。

辻⁶⁾の結果と比較するとやや内的他者意識の平

均値が高くなっている (図1)。対人援助職である看護師という職業を選択した学生は、最初から人に対する意識が高い、又は興味を持っている傾向があるとも言える。その傾向は学年が上がっても変化しない、という結果となった。

表1 死生観の学科別平均値と標準偏差

	学年・(数)	平均値±SD	有意確率	
死生観尺度	1. 死後の世界観	3年次 (n=68)	18.4±5.88	n. s.
		4年次 (n=63)	18.32±4.62	
	2. 死への恐怖・不安	3年次 (n=68)	17.22±5.43	n. s.
		4年次 (n=63)	16.5±5.6	
	3. 解放としての死	3年次 (n=68)	12.13±5.82	n. s.
		4年次 (n=63)	13.48±5.55	
	4. 死からの回避	3年次 (n=68)	10.4±5.07	n. s.
		4年次 (n=63)	10.08±4.25	
	5. 人生における目的意識	3年次 (n=68)	14.75±4.27	p<.05
		4年次 (n=63)	16.33±4.4	
	6. 死への関心	3年次 (n=68)	16.43±5.63	n. s.
		4年次 (n=63)	16.68±4.33	
	7. 寿命観	3年次 (n=68)	10.93±4.56	n. s.
		4年次 (n=63)	11.21±4.6	

n. s.: not significant

表2 「人生における目的意識」の下位項目の
学科別平均値と標準偏差

死生観	5. 人生における目的意識	学科・ (数)	平均値± SD	有意 確率
	私は人生にはっきり とした使命と目的を 見いだしている	3年次 (n=68)	3.24± 1.36	
4年次 (n=63)		4.14± 1.29		
私は人生の意義、目的、 使命を見いだす 能力が十分にある	3年次 (n=69)	3.26± 1.28	p<.01	
	4年次 (n=64)	3.89± 1.27		

表3 他者意識の学科別平均値と標準偏差

他者意識	1. 内的他者意識	学年・(数)	平均値±SD	有意 確率
		3年次 (n=68)	25.82±3.48	
4年次 (n=63)	25.94±3.4			
2. 外的他者意識	3年次 (n=68)	13.46±3.09	n. s.	
	4年次 (n=63)	13.24±2.72		
3. 空想的他者意識	3年次 (n=68)	12.78±2.95	n. s.	
	4年次 (n=63)	12.76±3.6		

n.s.: not significant

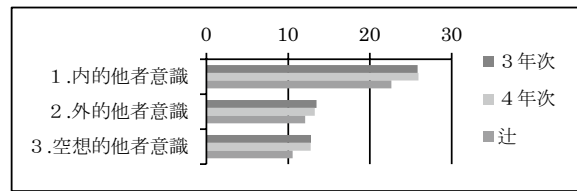


図1 他者意識の学年別平均値と辻の平均値

3. 死生観尺度と他者意識の関係

学年毎に死生観尺度と他者意識の相関を見ると、3年次では「死への関心」と「空想的他者意識」 $\rho = 0.271$ ($p < 0.05$) の1項目で弱い相関が見られた(表4)。4年次では「内的他者意識」とは「死からの回避」 $\rho = -0.293$ ($p < 0.05$) で弱い負の相関がみられ、「内的他者意識」と「死への関心」 $\rho = 0.329$ ($p < 0.01$)、「外的他者意識」と「死への恐怖・不安」 $\rho = 0.259$ ($p < 0.05$)、「空想的他者意識」と「寿命観」 $\rho = 0.285$ ($p < 0.05$) の3項目で弱い相関が見られた(表5)。

3年次で弱い相関が見られていた「死への関心」と「空想的他者意識」は、4年次に「内的他者意識」との関係へ変化したように取れる。また「内的他者意識」が高い人は、死から回避せず、関心が強くなる傾向が示唆された。

表4 3年次の死生観と他者意識の Spearman 順位相関係数

他者意識		死生観						
		死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	人生における目的意識	死への関心	寿命観
他者意識	内的	0.073	0.123	0.058	-0.047	0.002	0.174	0.047
	外的	0.13	0.009	-0.075	-0.036	-0.002	0.01	-0.08
	空想的	0.039	0.115	-0.086	-0.029	-0.105	0.271*	0.044

* $p < .05$

表5 4年次の死生観と他者意識の Spearman 順位相関係数

		死生観						
		死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	人生における目的意識	死への関心	寿命観
他者意識	内的	0.091	0.073	0.007	-0.293*	0.241	0.329**	0.201
	外的	0.209	0.259*	-0.011	0.054	-0.192	-0.051	0.116
	空想的	0.157	0.243	-0.041	-0.157	-0.134	0.219	0.285*

*p<.05, **p<.01

V. 考 察

1. 学生の死生観

死生観尺度では、「人生における目的意識」に3年次と4年次で有意差がみられた。また下位項目でも有意差がみられ、4年次には人生の目的や意義を見いだしている結果となった。これは臨地実習を通し、様々な人との関わりや看護を実体験として知った事により、看護師として自己の目標を考え始めたことや就職活動を通し、これからの人生について現実的に考え始めたためと思われる。

死を考える直接的な尺度では有意差がみられなかったことから、学生のうちは「死」を考えることよりも「生」を考える方が受け入れやすいとも思われる。石田⁷⁾は「学生は生命の誕生を尊いものと捉えており、自己の生を肯定的に受けとめている」と述べている。学生には生きている今を尊重し、意味を考えさせ、生の延長線上にある死について意識し考えていけるような教育が必要と考えられる。

加藤と百瀬⁸⁾は「終末期ケアを考えたきっかけに講義や臨地実習をあげたものは、1年生よりも3年生で有意に多かった」と述べている。講義のみでも死について考えることはできるが、臨地実習での実体験が大きな影響を与えられられる。身内の死とは違い、職業として他者の死を看取することを考える機会となる。対象者の状態悪化や死を身近に感じると、学生の感情は大きく揺さぶられることとなる。その体験を活かし、生と死

について考え、話し合う時間を設けることが死生観構築の一つの方法になると考えられる。

今回の調査では、看護学生時代に死生観が大きく変化することはないが、講義や臨地実習を通し、生きることや生きていく目的を考える機会となっていることが示唆された。

2. 他者意識について

他者意識では、3年次と4年次で有意差はみられなかった。臨地実習は他者意識への変化に影響を及ぼさないことが示された。昨年の調査から他者意識は、学年間で有意差がみられていなかった事からも、学生時代に変化するものではないということが示唆された。しかし辻⁶⁾のデータと比較すると看護学生はやや平均値が高いことから、一般学生よりも他者への関心は高いと思われる。看護という職業を選択した動機の一つとして、人に興味、関心を持っているという事が考えられる。

他者への関心や感情を察知する力は、いつ頃から育まれているものなのか。エリクソンの発達課題では、青年期は自我同一性の確立とされている。高校生位までに自己が確立できると、他者へ関心に向けていく可能性がある。辻⁶⁾の調査は大学生と高校生を対象に実施されている。自己確立がまだ不十分な高校生が含まれていたため、看護学生との間に差がみられた可能性がある。看護師を志す学生が、他者へ興味・関心を示し、理解しようとしているのかを把握するためには、入学前に調査する必要があると考える。

内的他者意識が高い人は、他者の内的な心的過

程に注意を向けやすく、感情を敏感に認知すると考えられ、言語的表出と非言語的による表出の背後にある感情を直感的に理解すると考えられている。看護師にとって他者を理解する力は、必要不可欠である。他者への意識付けは、教育で変化するものか、今までの成長過程で養われるものなのかを知るために、今後も継続調査していく必要があると考える。

3. 死生観と他者意識の関係

死生観と他者意識の関係は、「死への関心」と「空想的他者意識」との間で、3年次に弱い相関が見られた。これは現実的な死よりも魂や死後の世界など自己の空想の中やゲームなどのバーチャルな世界の中で考えている可能性がある。講義のみの授業では、死を現実的なこととまだ捉えきれず、空想的イメージが強い学生が関心を示していると考えられる。4年次になると「死への関心」は、「内的他者意識」と弱い相関が見られるようになっていく。臨地実習を通し、空想的な関心から直接的な関心へ変化し、内面を理解しようとする学生の関心が高まったと考えられる。

4年次では「死からの回避」と「内的他者意識」の間で負の弱い相関、「死への恐怖・不安」と「外的他者意識」の間で弱い相関が見られている。実習を通し様々な状態の対象者と関わることにより、死について直接的な関心を持ち、そこを回避できないという事を理解してきていると考えられる。しかし一方では恐怖や不安も強くなっている可能性がある。これはイメージ的な死ではなく、現実のことと認識をすると不安や恐怖が強くなるのは当然のこととも言える。臨地実習は、死に対して直接的な関心を示し、考える機会を与えていると考えられる。「寿命感」と「空想的他者意識」の間でも弱い相関が見られている。死を現実の事と考え始めているが、まだどこかで運命的なものを感じており、現実のものとして捉えきれない両価的な状態であると考えられる。

前原と橘川⁹⁾は「相手の気持ちを想像できる人

ほど、死に関する経験後、他者や社会に視点を向けることが出来るようになったと感じ、生や死の意味を考えていた」と述べている。内的他者意識が高い学生は、臨地実習での体験により死生観が変化する可能性がある。今回の調査では、個別の死生観と他者意識の推移を検討していないため、個々の学生の変化は分からなかった。

4. 死や生に対する看護教育

看護教育の中で、死や生に関することは様々な講義の中で触れられており、緩和ケアなどの科目として行なっている場合もある。しかし講義だけでは、現実感が湧いてこないのが学生の現状であろう。また身内との死別体験があったとしても、他者である対象者の死や看取りは、感じ方や考え方が違う可能性が高いと思われる。

松下と尾方¹⁰⁾は「死別体験の有無はそれだけでは、意識上の死生観に関連がみられなかった」、前原と橘川⁹⁾は「介護や看取りといった経験の伴わない死別体験は、その後の人生や生き方に大きな影響を与える出来事ではないと考えられる」と述べている。そのため学生がプライベートの死別体験ではなく、臨地実習で得られる他者の死や看取り経験は、死生観の確立に大きな影響を与えると考えられる。特に受持ち対象者の看取りや急変に関わった場合など、漠然と考えていた他者の死について、現実のことと認識せざるを得ない状況となる。病院では、死に向かっている対象者のケアを直接的に行うのは看護師である。その時の経験をどのように学生の中で消化させ、また他の学生に伝えていくのかが、死生観構築の一つの手段になると考える。

臨地実習での看取りや死に対する体験が、死生観構築に影響を与える一方で、マイナスな感情として学生の中に残る可能性もある。そのマイナスな感情が解消されず、就職してしまうとバーンアウトする可能性があると考えられる。久保木と崎山¹¹⁾らは「患者が亡くなったと知ったときから実習終了後までの時期に1番のマイナス感情が存

在していた」「普段の感情に戻るまで1ヶ月以上かかるパターンがある」と述べている。経験がすべてマイナス感情として残る訳ではないが、死生観構築と同時に学生の感情変化についても考えていく必要があると思われる。

5. 研究の限界と課題

今回の調査は、1か所の大学3、4年次の2年間の変化だけである。また調査対象人数や地域も限られたものであった。そのため、一般的な看護学生の死生観や他者意識とは言えない。

今回使用した死生観尺度は、臨老式「死生観尺度」だが、この他にも金児の「死観尺度」や河合の「死に対する態度尺度(DAP)」などがある¹²⁾。看護学生の死生観を考える時、既存の死生観尺度が良いのか、新たな尺度が必要なのかも検討する必要がある。また死生観、他者意識とも、同一学生よる縦断的研究は見あたらない。看護教育の中で「生」や「死」、「看取り」に関することをどのように教育していくかを考えていくためには、入学時から卒業後数年間程度の調査の蓄積が必要であると考える。

謝 辞

本研究の調査にあたり、ご協力頂いた学生の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 厚生労働省平成22年簡易生命表の概況.
- 2) 新山悦子, 小濱啓次: ホスピス・緩和ケア病棟に勤務する看護師の職場における心的外傷経験—自由記述による収集と分類—. 成人看護Ⅱ: 291-293, 2005.
- 3) 藤腹明子, 小山敦代, 荻田千栄: 看取りの心得と作法. 168-169, 医学書院, 1994.
- 4) 風岡たま代, 伊藤ふみ子: 看護教育における看護学生の死生観に関する本邦過去35年間の研究の概要. 横浜創英短期大学紀要4:

1-11, 2008.

- 5) 平井啓: 臨老式「死生観尺度」. http://rinro5.hus.osaka-u.ac.jp/mt/archives/2005/02/post_3.html
- 6) 辻平治郎: 自己意識と他者意識. 149-164, 北大路書房, 2003.
- 7) 石田美知: 看護学生の死生観構築を目指した教育の一考察. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科. 人間文化研究9, 111-126, 2008.
- 8) 加藤和子, 百瀬由美子: 看護学教育における看護学生の死生観に関する研究. 愛知県立大学看護学部紀要15: 79-86, 2009.
- 9) 前原佳奈, 橘川真彦: 大学生の死に関する経験による人格的発達—共感生・死に対する態度の視点から—. 宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要31: 293-300, 2008.
- 10) 松下姫歌, 尾方綾: 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連. 広島大学大学院 教育学研究科紀要第三部58: 159-168, 2009.
- 11) 久保木優佳, 崎山栄子: 受持ち患者の看取りを経験した看護学生の感情変化のプロセスとその要因. 第38回看護教育, 36-38, 2007.
- 12) 堀洋道監修: 心理測定尺度集Ⅱ. 131, サイエンス社, 2009.

Views on life and death as well as consciousness towards others of nursing students

– Comparison before and after clinical training –

HAYASAKA Hisami

Abstract: A study was carried out on students of the Nursing Department in order to compare before and after clinical training and specifically investigate the relationship of both criterion regarding nursing students' views on life and death as well as consciousness towards others. As a result, a significant difference was observed in the "sense of purpose in life" regarding views on life and death, but no difference was observed with regard to consciousness towards others. Regarding the relationship between the criterion for views on life and death and consciousness towards others, a weak negative correlation was observed between "escaping from death" and "internal consciousness towards others," and a weak correlation was observed between "concern towards death" and "internal consciousness towards others," between "fear/anxiety towards death" and "external consciousness towards others," and between "sense of life span" and "imaginary consciousness towards others." It was suggested that clinical training had an effect on the construction of views towards life and death in nursing students. Moreover, it was indicated that students with a high internal consciousness towards others do not tend to ignore death, but instead tended to have an increased concern about death. It is believed that in order to construct views on life and death, it is necessary to utilize experiences from clinical training and psychological support that do not leave the experience thereof as a negative emotion.